

胞であるが、種々のT細胞が果たす役割は、腫瘍によってさまざまである。多くの腫瘍は、MHCクラスII抗原を発現しないが、MHCクラスI抗原に結合した拒絶抗原を認識し拒絶反応を起こすのは、主としてCD8CTLであり、CD4T細胞は種々の程度に関与する。腫瘍によっては、CD4とCD8の共同作業が必須のこともある。

われわれは、FBL-3白血病についてMHCクラスII抗原陽性変異株FBL-3Nを得た。FBL-3についてはCD8陽性細胞が拒絶に主として関与するが、FBL-3Nの場合は、CD8陽性細胞を除去しても、効率よく拒絶される。この場合、CD8以外のどのようなT細胞が拒絶に関与しているのかを検討した結果、CD4CTLとCD4-CD8-CTLがこの活性を担っていた。つまり、MHCクラスII分子に結合した拒絶抗原に対しては、CD4CTLが生成され、さらにCD4-Thの助けにより、CD4-CD8-CTLが誘導されることがわかった。これらの種々のT細胞の反応における認識抗原の解析が抗腫瘍免疫の効果的誘導と拒絶抗原の本態を明らかにする上で重要である。

### 特別講演(3)

#### 環境の発がん物質に対するヒト曝露の研究手法

早津彦哉  
(岡山大学・薬学部)

細胞の活動は遺伝子の持つ情報によって制御されている。細胞が無限に増殖してゆくのがガンであるが、これは遺伝子が傷を受け、変化してしまったためである。遺伝子に傷をつける原因物質のうちでも、環境中にある変異物質が大きな問題となっている。ヒトがこのような物質に曝露されていることがヒトのガンのひきがねとなっていると考えられている。このような曝露を調べることが少しずつ可能になってきた。この講演では

1. ガンは「遺伝子の病気」
2. ガンの原因
3. 発ガン物質の検出
4. ガンの予防

の4項目に分け、これまでの研究成果を中心に紹介した。

## 平成4年度役員会報告

平成4年度の役員会は12月4日(金)12時30分から50分まで、まきび会館において行なわれた。

議題ならびに討議内容は下記の通りである。

①次期研究会長の選出：11月10日～20日までの間に郵便投票による選出を行い、11月26日の選挙管理委員会（常務理事会）で開票した。

その結果、栗本雅司氏（林原生物化学研究所・藤崎研究所長）が次期研究会長に選出された。

②理事・常務理事・監事の選出：現理事に加えて、湯原正高先生（岡山大学・農学部）、高橋正佑先生（ノートルダム清心女子大）が理事に選出された。また、現常務理事に加えて河田哲典先生（岡山大学・教育学部）が常務理事に選出された。監事の湯原正高先生が理事になられたことから、河本泰生先生（岡山大学・農学部）が中永征太郎先生（ノートルダム清心女子大）とともに監事に選出された。

③会計の中間報告：平成4年度の収入、支出と残高状況について報告があった。

④活動報告：平成4年度は2回(第23回、第24回)の研究会が行われ、また、研究会報第9号が6月に発行された。この会報では新しい試みとして企業のご協力を得て、広告掲載を行った。

⑤次期(第25回)研究会：来年6月頃重井医学研究所で開催していただくようお願いした。

⑥その他：研究会報10号の原稿募集、会員数の動向について報告した。

なお、常務理事会は5月2日、9月16日、11月26日の3回に開催したが、5月と9月の常務理事会では平成4年度に開催された2回の研究会の企画、立案を行なった。11月の常務理事会は次期研究会長の選出を行うとともに、次期役員を選出について討議した。